

ドイツの学生がアニメに込めたメッセージ

～大人が決して忘れてはいけないこと～

「誰だって、子供のころ外で思いっきり走り回った経験があるでしょう。そんな当たり前のことが、福島の子供たちはできないのです」

こう訴えるのはデザイン専攻のドイツ人大学生、Shoko Hara さん。彼女の卒業制作である 3.11 をテーマとしたアニメーション映画が、リオデジャネイロで開催された第3回ウラニウム映画祭で最優秀賞に選ばれた。同映画祭は、原子力に関わる問題の映画作品の国際コンテストとして 2011 年から開催されている。

福島で被爆し、外で遊べない少女の空想と絶望を描いた。使ったコマは実に 6000 枚。若干 4 分のショートフィルムの製作に、2 か月を費やした。その一枚一枚は、Shoko さん自身の手による墨絵であり、とんぼや桜の木など、日本の風物詩が象徴的にちりばめられている。

日本人の両親を持つ Shoko さんは、父親の転勤に伴って 10 歳の時からドイツに住んでいる。日本語よりドイツ語を得意とするが、日本への思い入れは人一倍強い。

「私は日本に誇りを持っています。日本が 3.11 の悲劇に見舞われた時、何か行動しなければと思いました」

しかし、学生である彼女にとって被災地に向けた金銭的な援助は難しい。「はっきり分かっていたのは、悲劇を決して忘れてはいけない、ということ」。それを伝える手段として、彼女は映画を選んだ。

映画のタイトル「Abita」は、二重の意味を持つ。日光を「浴びた」こと、そして放射能を「浴びた」ことだ。映画の中では日光が、ある日突然放射能に切り替わる。そして、主人公の少女はガスマスクをつけた大人に連れ去られ、隔離された部屋の中でかつて自由に遊んだ外の世界を夢見る、という筋書きだ。

ヒントとなったのは、福島の子供たちによる絵画集である。画用紙いっぱい描かれていたのは、震災前、かつて遊んだ山や海だった。がれき処理の問題はしばしば取り沙汰されるが、外で遊べない福島の子供たちの状況は表立って報道されない。

「子供たちこそ、世界の希望です。その子供たちに、世界は無関心でいて許されるのでしょうか。問われているのは、私たちの人間性です」

主人公の小学生とおぼしき少女には名前もなければ、言葉も発しない。徹底した匿名性の中で表現したかったのは、誰もが抱え持つ子供時代への憧憬だ。外で体いっぱい動かすことが、どれだけ素晴らしいことだったか。映画は、一行の言葉で締めくくられる。

「これはどこにでもいる女の子のお話です」

浅井 あいみ